

研究種目：基盤研究 (C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19520086

研究課題名 (和文) 「ヨネ・ノグチの美学」の比較受容史的研究

研究課題名 (英文) The Comparative and Historical Research for the Aesthetics of YONE NOGUCHI

研究代表者

北村 清彦 (KITAMURA KIYOHICO)

北海道大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：70177864

研究代表者の専門分野：美学・芸術学

科研費の分科・細目：美学・美術史

キーワード：ヨネ・ノグチ、イサム・ノグチ、文化的二重国籍性、外山卯三郎、牧野義雄

1. 研究計画の概要

ヨネ・ノグチ (野口米次郎、1875-1947) は明治以降、初めて英語で書かれた詩集を刊行した日本人として知られ、第二次大戦までは、その思想や芸術観はイエイツらの象徴主義にも影響を与え、戦前、欧米の文学界ではアジアの詩人としてはインドのタゴールと並んで高い評価をえていた。しかし、欧米の物質主義に対して東洋の精神主義を唱え、第二次大戦中、若者を戦争へと駆り立てるような詩を盛んに発表していた。そのような国粹主義的言動に対して、戦後の文壇は厳しく戦争責任を問いつたが、彼自身は何の釈明もしないまま、まもなく没したのである。そのためにヨネの思想や美学を論じることがいわばタブーとなって、今日ではほとんど忘れ去られた状態にある。

一方で、ヨネの息子である彫刻家イサム・ノグチの世界的評価が高まり、イサム芸術における東西文化の矛盾的共存という特質が父親のそれと重なっているようにも思われる。例えばイサムは、芸術家ヨネのことについては、「私の父ヨネ・ノグチは、日本人であり、詩を通じて、西洋に対して東洋を理解せしめた人物として早くから知られています。私はこれと同じ仕事を、彫刻によって行いたいのです」とまで書き記している。

父ヨネは青年時代を欧米で過ごしたがゆえにかえって日本主義・東洋主義に傾倒し、逆に息子イサムは青年時代を日本で過ごせなかったゆえに、日本的なものに対して鋭い感性を發揮した。本研究は二つの文化に同時に精通しながら、そのどちらにも自己同一性を見いだせないことを「文化的二重国籍性」としてとらえ、その矛盾を生きて、芸術作品

として実現することの重要性を明らかにするものである。

2. 研究の進捗状況

(1) ヨネ・ノグチは当時の日本人としては傑出して欧米文化事情に精通していたのみならず、米国、英国、インド等各地に多くの知人友人を持ち、日本文化を積極的に欧米に紹介する「文化大使」の任を担っていた。それにも関わらず、なぜあれほどまでに極端な国家主義へと与していったのが、第一の問題である。本研究では、それを「文化的二重国籍性の破綻」が原因であることを明らかにした。すなわちヨネが青年時代に被った米国における被差別的な扱いが彼にルサンチマンを植え付け、英国的なものに対する日本的なもの優位性という思想の核を形作ったとしても、ヨネが英語で思考し、英語でその作品を発表している限りは、そのような思想は表面化しなかった。しかしながら、帰国後17年にして日本語で作品を発表しはじめたときを境に、ヨネが抱えていた「文化的二重国籍性」は破綻を来し、国家主義へと傾斜していったと考えられるのである。

(2) 第二の問題は、ではこのような「文化的二重国籍性」がヨネにのみ関わる概念なのかといえば、例えばヨネの友人である画家・牧野義雄は長くロンドンに留まり、やがて国籍によって評価が左右されることのない、自らの芸術を完成させるに至る。あるいはヨネが帰国し、旺盛な執筆活動を続けていた明治末から昭和初期の時代そのものが、日本という国家の文化的二重国籍性が破綻する時期でもあった。ヨネの長女の夫となる外山卯三郎は北海道帝国大学予科、京都帝国大

学文学部でドイツ美学を学び、また当時のフランス美術にも精通するのみならず、自らも文芸活動や前衛的芸術活動に携わった美術評論家である。そのように当時の西洋に関して一流の知識を持っていた人物が、陸軍軍人で満州国創設にも深く関与した石原莞爾の蔵書を引き受け兵法に関する書物の翻訳に携わっていったのである。

これら例からも「文化的二重国籍性」という概念は決して静態的なものではなく、その二重性を一元化しようとするベクトルと、あくまで二重性を保持し続けようとするベクトルとの力動性のなかにあることが明らかになった。

3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している

「ヨネ・ノグチの美学」を明らかにすることにより「文化的二重国籍性」という概念を打ち立てられたことが、一番の成果であり、かつそれをイサム・ノグチや牧野義雄、外山卯三郎らとの比較によって一層明らかにしてきた。ただし本研究は「比較受容史的研究」でもあり、ヨネの美学が欧米あるいはインド、中国など諸国にどのように受容されたのかについての研究が依然として十分だとはいえない。ロンドンにおけるヨネの講演、イエイツ等との書簡の交換、タゴールとの論争などを通じて、ヨネの美学のもたらした国際的な影響を歴史的に明らかにすることが残された課題である。

4. 今後の研究の推進方策

3で取り上げた課題を遂行するために、ロンドンでの講演を詳細に分析し、ヨネの美学の何が受け入れられ、何が拒否されたのかを明らかにする。またヨネと親交のあったイエイツやエズラ・パウンドとの関係から、欧米における象徴主義やイマジズムの形成にヨネの美学が何かしらの影響を及ぼしていたことも考えられる。

また「文化的二重国籍性」の政治性を追求するために、パウンドおよびタゴールとの関係を明らかにする。前者は第二次大戦中、イタリアのファシズムに深く関与し、ヨネとの親和性が強いが、後者は欧米列強の中国侵略に対して真っ向から対立する。そのような論争を通じて「文化的二重国籍性」の概念をより現実に即応可能なものとして発展させることが重要である。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

① 北村 清彦, 芸術作品としての「疋田写真」—その記録性と自己目的性—, 疋田豊治 ガラス乾板写真展図録, 査読無, 2009, 72~73.

② KITAMURA Kiyohiko, The Aesthetics of Cultural Double Citizenship: The Case of the Japanese Poet, Yone NOGUCHI, CONGRESS BOOK 2, Selected Papers XVII. 査読有, INTERNATIONAL CONGRESS OF AESTHETICS, 2009, 133~140.

③ 北村 清彦, 「環境」と「芸術」, リテラポブリ, 査読無, 16~17, 2008.

[学会発表] (計1件)

① KITAMURA Kiyohiko, Aesthetics of Cultural Double Citizenship—A Case of A Japanese Poet, Yone NOGUCHI —, XVII International Congress of Aesthetics, 2007. 7. 9, Ankara, Turkey.

[図書] (計2件)

① 北村清彦他8名, 北海道大学出版会, 北方を旅する—一人文学でめぐる九日間, 2009, 59~90.

② 篠原 資明, 北村 清彦他8名, 岩波書店, 岩波 講座哲学07 芸術/創造性の哲学, 2009, 89~110.

[その他]

http://www.hokudai.ac.jp/bureau/populi/edition34/littera34_pdf/littera34_16_17.pdf

http://www.hokudai.ac.jp/bureau/populi/edition34/littera34e_pdf/littera34e_16_17.pdf